使徒言行録 10 章 23b-33 節
「なぜお招きになったのですか」

前回の個所で、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。」という幻をペトロが見ました。ペトロは、この幻はいったい何だろうかと、その意味するところを一人で考え込んでいたのです。同じく天使に呼びかけられたコルネリウスに差し向けられた人々が、ペトロを訪ねました。ためらったペトロに、聖霊は「ためらわないで一緒に出発しなさい。」と告げ、翌日カイサリアへと出かけたのです。

ペトロは、異邦人であるコルネリウスからの使いから、事情を聞くことによって、先程の幻の意味を理解したようでした。それは、28節でペトロが告げているからです。ここで、「ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは律法で禁じられています」とありますが、これは先週の食物規定と深く結びついています。交際、交わりの中心は食卓の交わりでありました。異邦人の食卓は、それはどんなものがでてくるか分からない。それゆえ、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは律法で禁じられていたと言えるのです。食卓の交わり、これは教会においても中心的な交わりでした。当時の聖餐は食卓の交わりと一体的になされておりました。ですから、すべてのものが神によって清められたということは、ユダヤ人と異邦人の壁が神によって取り除かれたということを意味しているのです。それゆえ、ペトロは、ためらうことなく、異邦人であるコルネリウスの家を訪ねることができたのです。

ここに一つの奇跡が起きます。これまで交際しなかったユダヤ人と異邦人が、肩を並べて語り合っているのです。主の天使のお告げのゆえに、コルネリウスはペトロのもとに使いを送り、大勢を呼び集めてペトロの到着を待っていたのです。そのコルネリウスが、ペトロの姿を見たとき、思わずひれ伏してしまったのは自然なことでしょう。しかし、ペトロは彼を起こしてこう言いました。「お立ちください。わたしもただの人間です。」これは、「わたしもあなたと同じ人間です」という意味です。自分の足もとにひれ伏すコルネリウスを、ペトロが起き上がらせ、そのようなことはしないでください。私もあなたと同じ人間なのだからと言うのです。そして、話しながら家に入っていきました。ここで、明らかにペトロの姿勢が変えられています。神から、どんな人をも清くない者と言ってはならないことを教えられたペトロの姿をここに見ることができるのです。

ペトロは大勢の人が集まっているのを見て、「なぜ、自分を招いてくださったのか」と尋ねます。すると、コルネリウスは 30－33 節のように答えました。つまり、ペトロを招いたのは、主の天使のお告げによるものであるということ。そして、このことは、ペトロが、ヤッファの屋上において聞いた聖霊の声と一致するものでありました。そこで霊はペトロに、

「わたしがあの者たちをよこしたのだ」と告げました。その聖霊の言葉が、コルネリウスの言葉を聞くことによって、ペトロの中で繋がったのだと思います。

これは確かに信仰的な事柄です。そして、その信仰的な事柄を可能としてくださるのは、私たちの心に働いてくださる神の霊、聖霊にほかならないのです。聖霊が、ペトロに、「わたしがあの者たちをよこし招いたのだ」と言われたように、聖霊は、私たちの心にも信仰による確信を与えてくださるのです。今朝の御言葉で言えば、「今わたしたちは皆、神の前にいるのです」という思いがどうしても必要なのです。そして、そのことは、説教を聞く者に先だって、何より説教を語る者に必要とされることなのです。ペトロが、ひれ伏すコルネリウスに「お立ちください。わたしもただの人間です」と語り得たのはなぜか。それは何より、ペトロ自身が、主の御前に生きる者であったからであります。ペトロがコルネリウスに「わたしも同じ人間です」と語り得たのは、神の御前においてであったことが分かるのです。主の幻を通して、神の御前にすべての人が同じ人間であること、神の御前にはどのような人も汚れている者はいないという信仰を与えられていたのです。それゆえ、私を拝んではならない。神を共に拝もうとコルネリウスを立ち上がらせるのです。

礼拝とは、神が神として拝まれ、神にだけ賛美が献げられ、神の栄光が最も端的に表される場であります。その礼拝の場で、説教者その人自身を拝んでしまったらどうなるか。それこそ、神様の栄光を奪うことになってしまうわけです。それゆえ、ペトロはコルネリウスを即座に立ち上がらせたのでありました。礼拝にあずかるわたしたち一人一人に、神の御前にいるという敬虔さが求められています。信仰者としての私たちの姿勢が問われるのです。神さまから招かれた者として私たちは、週の初めの日ごとに、神を共に崇め、神の御前に生きる信仰の姿勢を正して行きたいと願います。